

# 松友会だより

編集 松友会  
新聞編集委員



種を蒔かずには過ごしては  
実るものなど何も無い  
清永 辰生

立春から八十八日目に当る五月二日頃が八十八夜です。強さを増しつつある太陽の光の下、青空や瑞々しい新緑の野山に、明るい陽光を見せてくれる頃、私共の生活にも齢を重ねるだけのカラツポの大人にならないよう、人に学び本に学び、体験に学び、身のこなし美しく、口にいづもありがとう、意(ココロ)に思いやりのやさしさをもちたいものです。「昔は自分にもいろいろな夢があったものだ」と懐かしみます。若い頃には「あれもしたい、これもしたい」と思うものですが、仕事や生活に追われ、三十代・四十代・五十代と年を経て、ようやく夢をかなえようかという時にあきらめてしまうケースがあります。特に体力が必要だったり、お金がかかったりするようなプランではなおさらです。

全国の名城巡りをしようと思つていたのですが、調べると「お金がかかる交通費と宿泊費と激しい年金暮らしでは、実現できそうにない」という気持ちになつて、宝くじが当たったら行こうと思うようになりまし。申し訳ないが「宝くじが当たったら」という言葉は、行動の先延ばしする為の口実や、言い訳のように聞こえ、「速いし時間もおかかるからもう行かなくてもいいかな」という結論に至ってしまうのではないのでしょうか。

春の種を下さずんば、秋の実りいかに獲ん」春に種を蒔かなければ、どうして秋に実りを得ることが出来るだろうか、という空海の言葉です。実際思つたことをなかなか実行できないのが私たちでしょう。ちよつと面倒だつたり手間のかかることは後回しにして、パツと飛びつける気軽な楽しみに流されがちです。

「名城巡りをしようと思つたけれど、お金がかかるし無理」と思つた段階で夢は終わつてしまいます。しかし前もつて城の勉強をしたり旅行プランを調べたり、体力づくりや励んでいたとしたらどうでしょうか。絶対に夢を実現させたいと思うのではありませんか。

最近ではシニア向けに短い旅程のツアーなどもあるようで、これなら時間もお金もかからず体力的にも心配ないでしょう。やつてみたいと思ふことの種は、思いついた時に蒔いておくといつの日かうれい秋の実りを得られるかもしれませ

## 暮らし中の仏教語

### 「不退転」

不退転は強い信念をもち、何事にも屈しないで突き進む心構えという意味で、よく「不退転の決意」などと使われます。語源は仏教語です。

修行をしなかつたり、悪行を行つて、仏道から脱落することを「退転」と言います。反対に仏道の修行がかなり進み、もはや悪い誘惑に乗ることもなく、それまでで得た悟りを二度と失わない状態に達したことを「不退転」と言います。仏教の世界では、目指すべき境地とされているのです。

## 【五月度の主たる行事のご案内】

山も緑に変わり、新緑の季節となりました。総会も無事終了し、本格的に新年度のスタートです。皆様のご協力宜しくお願い致します。

☆月例会 五月十三日(土)開催です。

午後一時

内容は吉村先生の腹話術「おちゃんとお遊ぼう」です。お楽しみに！

六月は森田インストラクターの楽しいひとときが待っています。

☆五月誕生月の皆さんです。紙面にてお祝い申し上げます。

子史 貞哲  
枝子 英哲  
代子 千枝  
育子 武代  
7名 米田君  
(敬称略) 松木育子  
以上

## 【伝言板】

### ☆再生资源回収

五月十一日(木)宝塚 川西地区  
五月二十三日(火)川西地区  
皆さん、いつもご協力をいただき有難うございます。

引き続きよろしくお願い致します

☆松友会の新規会員様のご紹介

川島一義様(宝塚側)です。

西 鷹男様(宝塚側)です。

光崎允江様(宝塚側)です。

藤原里子様(宝塚側)です。

よろしくお願いいたします。

※松友会だよりの原稿を編集者一同心からお待ちしております。

雑感、紀行文、思い出話などお寄せください。お近くの班長、役員へご連絡いただければ嬉しく思います。

地域の皆様のご協力有難うございます。今後も再生资源の回収にご協力お願い致します。

月別再生资源回収成果	
令和 5年 3月分	
新聞紙	1,120 kg
雑誌	270 kg
布類	100 kg
段ボール	270 kg
合計	1,760 kg
回収奨励金 (@ 円)	円

ご協力ありがとうございました。

## 5月 行事予定 (予定表は変更される場合があります)

日	曜	行事	時間
2	火	健康体操	10:00~11:30
6	土	カラオケ	13:00~16:00
9	火	麻雀	10:00~12:00
10	水	まつがおかサロン	13:00~15:00
11	木	再生资源回収(宝塚・川西)	~8.30頃
13	土	月例会	13:00~15:00
16	火	健康体操	10:00~11:30
20	土	編集会議	10:30~11:30
20	土	カラオケ	13.00~16.00
23	火	再生资源回収(川西)	~11.00頃
23	火	麻雀	13:00~16:00
27	土	まっぼっくり	10:00~11:30
31	水	三味線伴奏	14:00~15:00



日本人の祖先は遊牧民？

和泉 清

カレンダーの語源には月が関係しているという。

大昔の人は、細い月が昇るのを一か月の始まりとした。祭司が、月が出たぞと叫んで待ち望んだ民衆に知らせた。呼び集めるという意味のラテン語「カロー」から「カレンダー」という言葉が生まれたそうである。

歴史書によれば、古来、遊牧民が太陰暦（たいいんれき）を、農耕民が太陽暦を採用していたようである。例えば紀元前1000年の中国では、遊牧民の周に滅ぼされた農耕民の殷（いん）は太陽暦を使ったようだが、800年後の春秋（しゅんじゅう）時代には両者が融合、紀元後100年の前漢時代には完全に太陽暦となった。

さて日本では、どうであったのだろうか。暦は音読みで「レキ」、漢字使用以前は「コヨミ」。訓読みで日を数えると、ついたち、ふつか、みっか、よっか、とおか、である。「ついたち」「つきたち」で、月が現れる、月末は「つこもり（月隠）」、月が隠れるであり、漢字以前の日本のコヨミは後世に言う太陰暦であったようである。遊牧民はいなかったにも拘わらずだ。

狩猟、漁撈（ぎょろう）を生業とした縄文人の生活する日本列島に、水田稲作を生業とする弥生人が大陸から鉄器生産技術を携えて入植し、縄文人と平和裏に融合して農耕が主流となったと私たちは教えられている。

縄文人には貝や小魚が海浜で容易に入手できたはずである。これらの入手には、大潮の日の干満時が最適であることを経験から彼らは熟知していたのである。彼らは潮の干満は毎月地球を一回りする月の引力によるものと知り、満月は大潮（おおしお）、弓張月（ゆみはりづき）は小潮（こしお）であると学んだのである。縄文遺跡には貝塚が多くあるが、貝は砂浜で簡単に採取出来る栄養価の高い食物である。

貝殻を積み上げた貝塚は、土偶（どぐう）、月、蛇などの祭祀（さいし）土器と同様に再生を祈念した祭祀であったといわれる。なお、お当時は、地球温暖化のため海進が進み、例えば現在の大阪平野も海面下であった。

このように、縄文人の生活は、潮の干満と月の満ち欠けに密着していて、自然発生的に太陰暦を使っていたといえるし、漁撈人が農耕主体人に脱皮した後も、この暦が以後江戸時代まで採用されて来たのである。

ちょうど151年前の1873年（明治5年）12月2日と3日は、本邦カレンダー史上最も劇的で且つ、ややこしい両日であった。すなわち、暮れの2日の翌日が突然、明治6年1月1日に改められたのである。太陰歴から太陽暦への転換である。国民はきつと目を白黒させたに違いない。

おかげさま

黒田 千代子

世界の教育者があつまる会議で、「日本の学校では子どもたちにどんなことを言い聞かせてますか」という質問がありました。

「人に迷惑をかけないようにとおしえています」日本人の先生がそう答えると、質問をした人が不思議そうな顔をして、こう言いました。「私たちの国では、子どもに人は生まれた瞬間から、他人に迷惑をかけながら生きていくということとを、忘れてはいけないよ」とおしえます。「それをおしえなかったら、日本の子どもたちはどうやって感謝の心を学ぶのですか」。

私たちは知らず知らずのうちに、まわりの人たちに支えられ、心配をかけながら生きています。

「おかげさま」ということがわかる人になりたいものです。

卒業記念文集「燈（ともしび）」

寛正 健嗣

松が丘へ来て昨年の年末で早や55年が経過。昨年から時間を見つけては、物の整理をするようにしています。押し入れや物置き、天袋は未だに物であふれています。一つ一つ思い出があるような、ないような物ばかりなので、整理するのにかかり時間がかかります。ここ2、3か月はきりがないので、整理するのをストップしています。

2階の未整理の本棚に、私が61年前に卒業した中学校の卒業記念文集「燈（ともしび）」（昭和37年3月15日発行）があるのを最近発見しました。文集を開くと紙面は茶色に変色しています。最初に校長先生、次に教頭先生の「卒業生に贈る言葉」が掲載されています。

校長先生は「道元禪師入寂は54才であった。私も半年後になれば54才を迎える。淋しく恥ずかしい。それでも、来る日も来る日も、型にはまった平常の朝を送り迎える私も亦、幸せである。」

教頭先生は「人を見てどろぼうとと思う『索漠とした心は悲しい。』渡る世間に鬼はない。」と、しみじみ心温まるお互いでありたい。生物学上のヒトという動物が、このような人間社会の可能性さえ信じ得ないなら『人間』と称して誇る何ものを持つているのであろうか。」

校長先生、教頭先生の言葉を今読んでみますと、私の心に深く響く何かを感じます。卒業当時は、おそらく全く何のこともわからなかったと思います。私自身、中学時代一体、何を考えていたのかお恥ずかしい限りですが、以下は私の中学卒業時の作文です。

「将来」

「僕は大きくなったら、何になりたいか、まだわからない。でも大人になったら何かになる。目標が決まっている人は、大きくなってからの方面に、行ったらよいかという事に迷わなくてもよい。だから僕も、自分の将来の事を決めたい。でも「なりたくないなあ」と思うものは二、三ある。その中で一番自分の好きなのはと言うと迷ってくる。だから何べん考えても同じなので、大きくなったら「何かになれ」と思う。

だが今は、そんなことを深刻に考えたことがない。いつか僕も熱心に考える時がやってくると思う。高等学校では自分の将来のことを考えて自分の方向を決めたいと思っている。高等学校でも決まらないのなら、自分にあっている職業につけないと思う。そんな時は平凡な職業でもよいから、人のためになるようなことをしたい。」

丁度61年前の幼稚な作文です。私はこの61年の間、「何をしてきたのだろうか。何のために生きてきたのか。人のためになるようなことをしてきたのか。これから一体どこへ行こうとしているのか。」振り返れば、現世という夢の中で生かされてきたような気がします。長いようで短いのが人の一生かもしれません。残りの人生、自分の最終章を考えていきたいと思えます。

編集後記

総会で皆様のご協力と笑顔を拝見して今年度も松友会を盛り上げていこうと思えました。